

お茶の水女子大学所蔵資料 セーラー・ブルーマー型体操服の来歴と構成

難波 知子
渡部 旬子

はじめに

本稿は、お茶の水女子大学歴史資料館に所蔵されるセーラー・ブルーマー型体操服の実物資料（図1）について、（1）女子体操服の変遷史上における本資料の位置づけと本資料が寄贈されるまでの経緯をまとめ、体操服の歴史的価値と所蔵に関する記録を残すこと、（2）体操服の材料およびデザイン・構成（パターン）を分析することで、本学において大正期に着用された女子体操服の実態を明らかにすることを目的とする。

本学における女子体操服の変遷については、本学教員であった輿水はる海が明治から昭和戦前期までの概要を明らかにしている。輿水によれば、本学設立時の「着袴」から「着流し」を経て、洋服の「ワンピース」が採用され、明治36（1903）年頃から「ブルーマ」、大正7（1918）年頃から一部生徒の間で「チュニック」が着用され、大正末から「丸えり」、昭和初期から「キュロットスカート（スポーツえり）」へと移り変わる概略がスケッチとともに示されている。そのなかでセーラー・ブルーマー型体操服については、明



図1 セーラー・ブルーマー型体操服（お茶の水女子大学所蔵）

治期に本学の体操教員を務めた井口阿くり（1880-1931）によって導入されたことが指摘されている¹。しかし奥水の研究は女子体育の指導者や教育内容に主眼が置かれており、各期の女子体操服の詳細な検討はなされていない。

またセーラー・ブルーマー型体操服の実物資料は2016年まで桜蔭会館2階にあった歴史資料室に展示され、その後、資料保管の観点から生活文化学講座歴史資料室において保管されているが²、寄贈者の氏名と卒業年のほかには、これがどのような経緯で本学に所蔵されるに至ったか、詳細な情報は伝わっていない。筆者らは2019年5月に放映された井口阿くりを取り上げた秋田テレビの取材に協力する過程で、この体操服の実物資料が、奥水による本学卒業生へのアンケート調査がもとになって寄贈されたことを確認した³。そこで本稿は、これまで十分に伝えられてこなかった体操服の実物資料に関する記録や奥水らによる研究活動の成果を明示するとともに、服飾史・被服構成学の立場から大正時代に着用されたセーラー・ブルーマー型体操服の材料および形態的特徴について、実物資料の調査・分析を通して明らかにする。

1 セーラー・ブルーマー型体操服の歴史的 position および実物資料の来歴

1-1 本学における女子体操服の変遷

ここでは、セーラー・ブルーマー型体操服が着用される前後の本学における女子体操服の変遷を概観する。奥水が本学の女子体操服の最初に位置づけている「着袴」とは、明治5（1872）年に官立女学校が開校する際に着用が認められ、その後明治8（1875）年に行われた東京女子師範学校の開校式で着用された男性用の襠のある袴（ズボン状。以下、この時期の袴を「男袴」とする）を示している⁴。東京女子師範学校の明治8年の教則にはすでに「体操」の学科目が確認できるが⁵、この時期には通学および在学の際に着用された男袴のまま、体操が行われたと考えられる。その後、男袴の着用は男装との非難を浴び、明治16（1883）年に文部省により女教員と女生徒の袴および靴の着用禁止が示される⁶。東京女子師範学校でいつ頃から男袴が穿かれなくなったかについては不明だが、鹿鳴館時代の明治18（1885）年に洋装が着用されるまでは「着流し」（長着に広幅の帯結び）となり、体操は「着流し」のままか、あるいは袖にたすき掛けで行われたと考えられる。男袴と着流しのスタイルは、たすき掛けを除けば、体操のために装われた服装ではなかったといえる。

体操のために専用の服装に着替えるという意味において、本学最初の体操服となったのは、坪井玄道（1852-1922）が導入したと思われる洋服式体操服であろう。坪井は体操練習所に招聘されたお雇い外国人リーランド（1850-1924）の通訳を務めたのち、学校体育における普通体操を整備した人物である。本学の体操教員として明治23～42（1890～1909）年まで在籍した⁷。奥水は明治21（1888）年頃から本学で洋服式体操服が着用されたと指摘しているが⁸、筆者はその根拠を確認できなかった。少なくとも奥水が指摘する「ワンピース」の体操服が記録として確認できるのは、明治35（1902）年の卒業写真である（図2）。この卒業写真には中央に写る坪井の周りに、ワンピースの体操服を着用した生徒が写っている。またこの体操服を着用した本学卒業生で、のちに本学裁縫科教員となった成田順の回想によれば、体操服への着替えのために寄宿舎まで急いで戻らなければならなかったこと（普段の服装は長着に袴）、体操服の形態については、ワンピースの下に膝丈の「ズボンしたよう」のブルーマーを穿いたことが伝えられる⁹。このワンピースの下にブルーマーを穿くスタイルは、坪井が編纂した明治20年代の体操書の挿絵に描かれた女



図2 明治35（1902）年の卒業写真（お茶の水女子大学所蔵）

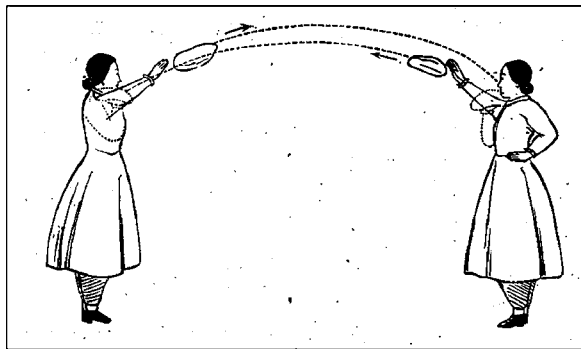


図3 体操書に描かれた女性の服装（坪井・田中『普通体操法』文部省、1887年）

性の服装とも一致する（図3）¹⁰。

次に着用された洋服式体操服がセーラー・ブルーマー型体操服である。女性で初めて体操に関する文部省留学生として、アメリカに留学した井口阿くりが持ち帰ったものである。井口は明治32（1899）年にスミス・カレッジとボストン体操師範学校に留学し、最新の体操理論やスウェーデン体操を学び、明治36（1903）年に帰国、女子高等師範学校に新設された国語体操専修科教授として着任した（図4）¹¹。セーラー・ブルーマー型体操服の導入については次節で詳述する。

大正期に入ってから、二階堂トクヨ（1880-1941）がイギリス留学から持ち帰った「チュニック」の体操服が一部生徒の間で着用されたと輿水は指摘している。二階堂は大正元（1912）年からイギリスのキングスフィールド体操専門学校に留学し、スウェーデン体操の理論を本格的に学んで帰国した。しかし帰国後、二階堂は和服式体操服の試作と皇后の行啓時における着初めを行っており¹²、また後述するとおり、大正期に入っても井口のセーラー・ブルーマー型体操服が引き続き着用されたことが窺える。なぜ二階堂の和服式体操服やイギリスから持ち帰られたチュニックが限定的な着用にとどまったのか。さらなる検証を必要とするが、先行研究によれば、当時本学に勤めていた永井道明との対立があげられる¹³。



図4 明治42（1909）年の卒業写真（お茶の水女子大学所蔵）

昭和期に入ると、当時の学校生活を撮影したアルバムのなかに白いシャツの上衣に膝下丈の下衣を合わせた体操服を着用した学生が確認できる¹⁴。輿水によれば、上衣は「丸えり」から「スポーツえり」と呼ばれるセーラー衿に変わったという。この頃になると洋装の通学着も現れ始め、体操服はより軽快なスタイルへと変化していることが窺える。

以上のように、本学では洋服式体操服となっても3～4種類の様式変遷がみられ、そのなかには体操教員の留学などを通して欧米の実践例が直接参照された事例も確認できる。

1-2 セーラー・ブルーマー型体操服の導入と本学における着用期間

前節で述べたように、セーラー・ブルーマー型体操服は井口阿くりのアメリカ留学をきっかけとして、明治30年代後半に導入された。本学においては、坪井のワンピースの体操服に続く二代目の洋服式体操服といえる。井口は帰国後、この体操服の調製を本郷にあった大河内婦人子供洋服店に依頼している。当時同店に勤めていた西島芳太郎の証言によれば、井口が体操服の調製を依頼したのは明治36～37（1903～4）年頃である¹⁵。体操服は「通学兼用の黒セル体操服」と「体操専科生は多く小倉織を用布に選んだ」との証言が残されているように¹⁶、黒の毛織物生地と綿の小倉織生地の二種類から製作された（図5・図6）。通学兼用の体操服とは、通学の際にはスカートを合わせ、体操の時間にはブルーマーを合わせる事が計画された、後述の文部省体操遊戯取調委員会で提案された様式である¹⁷。当初は井口が教授を務めた国語体操専修科の生徒に着用が限られたようで、先に取り上げた本学裁縫科教員の成田は、井口が留学から帰国した二年後の明治38（1905）年に本学の技芸科に入学しているが、井口の体操服ではなく、ワンピースの体操服を着用している。ワンピースの体操服を導入した坪井が本学を辞めたのが明治42（1909）年であり、それまではワンピース型とセーラー・ブルーマー型体操服が混在していたと考えられる。

また井口は明治37（1904）年に文部省体操遊戯取調委員会の委員に選出され、女子体操服の提案にも携わった。同委員会で提案された女子体操服は、セーラーの上衣に、「運動服」としてはブルーマー（図では「袴下」）を合わせ、「学校平常服」としてはブルーマーの上にスカート（図では「袴」）を合わせる



図5 通学兼用の黒セル体操服（お茶の水女子大学所蔵）

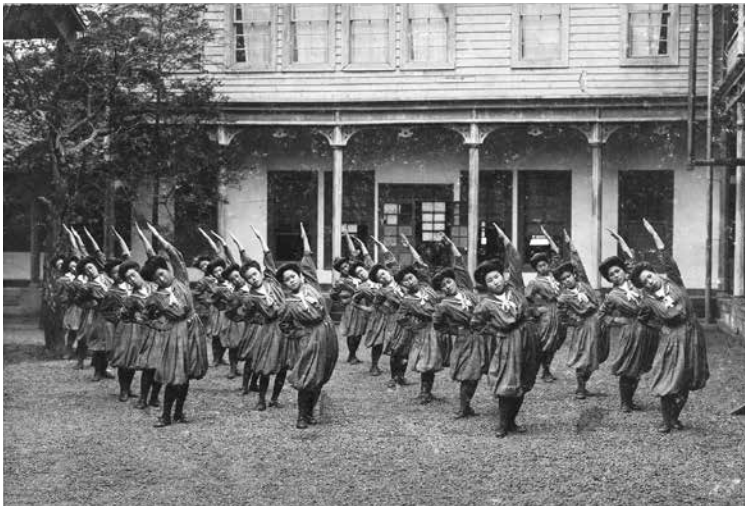


図6 国語体操専修科生徒の小倉織体操服（お茶の水女子大学所蔵）

様式であった（図7）。全国の高等女学校や女子師範学校での着用が期待されたが、実施の判断は各校に委ねられた¹⁸。

実際に着用されたのは管見の限り、数校の女子師範学校である¹⁹。当初は全国の高等女学校も含め、広く普及することが期待されたが、結果的には指導者となる女子師範学校生徒の限定的な着用にとどまった。しかし、井口が文部省の委員会メンバーの一人となり、洋服式的女子体操服を提案したことの意義は大きい。女学生や職業婦人をはじめとして、一般女性の間で洋装が普及し、定着をみせ始めるのは第一次世界大戦後の大正末以降であり、井口や前述の坪井が導入した洋服式体操服は女性の洋装普及の画期よりも前の時代にあたる。特に井口の体操服は全国に模範として示され、各地の女子師範学校で共有されたことが確認できる。体操服を通じての洋装の広がりとその着用経験が及ぼした影響は看過できない。なぜなら体操の時間に限られた着用とはいえ、洋服式体操服を身に付けた女子師範学校の生徒たちの経験は、着用者本人の衣生活や当時の一般社会の女性服に直接的には影響を与えなかったかもしれないが、卒業後に教師となって生徒を指導する際、または母となって子どもに衣服を与える際の素地となったといえよう。特に

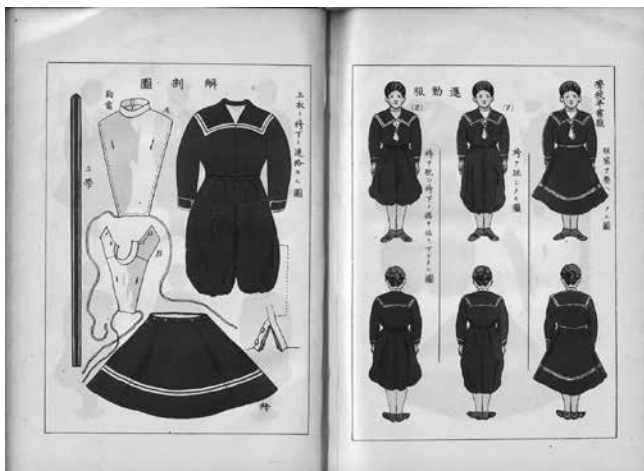


図7 文部省体操遊戯取調委員会で井口が提案した女子体操服
(井口ほか『体育之理論及實際』国光社、1906年)

子どもの洋装化は、教育を担う親および教師の考え方や経験が大きく影響したと考えられる。体操の時間に洋装を経験した女子師範学校の生徒たちは、自らの経験をもとに、次世代の衣生活を大きく変えていく存在となり得たのではないだろうか。

井口は明治44（1911）年に東京女子高等師範学校を退職したが、セーラー・ブルーマー型体操服は大正期に入っても着用されたことが、卒業アルバムに掲載された写真からも、また本稿で取り上げる実物資料の着用年代からも窺える²⁰。

1-3 実物資料の寄贈経緯と歴史的価値

冒頭で述べたとおり、筆者らは秋田テレビによる井口阿くりに関する番組制作の過程で、奥水らが行った卒業生への体操服に関するアンケート調査がきっかけとなって、大正期の体操服が本学に寄贈された経緯を確認した。アンケート調査に関しては、奥水はる海・外山友子・萩原美代子の連名で1979年に往復はがきを用いて行われ、この調査によってセーラー・ブルーマー型体操服を所蔵している卒業生が見つかったという²¹。具体的な寄贈の時期は不明であるが、少なくとも1979年以降に実現したと考えられ、体操服はその後、桜蔭会館に歴史資料室が開室した1999年以降に展示されることとなった。

奥水がアンケート調査により探し出した体操服の持ち主は、大正9（1920）年3月に本学を卒業した見戸タカである。入学年度は大正5（1916）年であり、家事科第一部に在籍した²²。見戸の在学年度から、体操服は大正5年頃に製作されたと推測できる。なお、本稿は実物資料の製作年代を重視して大正期の女子体操服として検証を進めるが、セーラー・ブルーマー型体操服の着用期間は明治期後半から含めることができる。すなわち本資料の検証を通して、明治期後半から大正期における女子体操服の具体的な様相を明らかにできると考えている。

また本資料の特筆すべき歴史的価値は、大正12（1923）年の関東大震災以前の点にある。本学の生活文化学歴史資料室には裁縫科に関するさまざまな教具・教材が伝わっているが、その大半は関東大震災後の大正末以降のものである。大学全体の資料に関しても、関東大震災以前のものは少なく、大正半ば頃に着用された体操服は本学の教育を伝える貴重な資料であるといえる。

2 セーラー・ブルーマー型体操服の材料および形態的特徴

ここからは、被服構成学の立場から大正期のセーラー・ブルーマー型体操服に使用された材料および形態的な特徴を明らかにする。方法は、まず資料をボディに着せ付けた状態や平面に置いた状態で目視観察しながら特徴的な部位を写真撮影し、拡大表示して大まかに特徴を捉えた。次に材料の諸元およびパーツ構成とパターン形状の把握について、資料の価値を損ねないよう非破壊で行った。

2-1 材料

表布の諸元については、拡大鏡、ダイヤルシックネスゲージを用いて織り組織、糸密度、厚さを計測した。結果、織組織は正斜文で2/1の3枚斜文、厚さ0.71mm、糸密度タテ24×ヨコ19(本/cm)であった。外観(図8)からタテ糸に色系、ヨコ糸に晒糸が用いられ、ヨコ糸の太さは不均一さが認められ、おそらく手紡ぎ糸ではないかと考えられる。このほか手触りが綿織物に近似していることから、布地はデニム²³の様相を呈しているといえる。前章では、体操服にセル(毛)と小倉織(綿)の二種類があった点を指摘したが、本資料は後者の小倉織の綿織物が使用されたと考えられる。

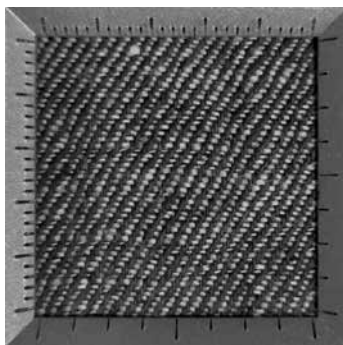


図8 体操服の表布の外観(筆者撮影)

表布以外の材料(表1)は現在も使用されるものと同様であった。ただし、下衣の裾に通している紐には伸縮性がなく固定された長さであった。現在は一般的に伸縮性のあるものや伸縮性のない場合は紐の末端を外に出し、着用時に引き締める方法を取ることが多い。このほかに、ボタンの大きさや色が異なるものが縫い付けられていたが、ボタン穴の大きさに差が無いことより代用品が用いられていると思われる。

2-2 デザイン

デザイン(図9)の特徴は、着用時は一見ワンピースに見えるが、上衣と下衣で構成され、それぞれのウエストベルトをボタン留めで連結し、さらにスカートのベルトを二重にしてボタンを隠した構造にある。上衣は上前の見返しに大型のスプリングホック、下前の持ち出しに鳩目穴をあけ、表からは突き合わせのように見せていた。下衣は左脇あきで、短冊(短冊型の細長い布)を重ねていた。外観から留め具が見えない比翼仕立てとなっており、これは上衣と下衣の隙間から下着や肌が見えない工夫と考えられる。

そのほかに特筆すべき上衣の特徴は、胸部上部にタックが3本施され、ウエストにギャザーが寄せられている点である。これは乳房の突出を立体的に包むためのデザインといえる。

表1 体操服材料の副資材（筆者作成）

部位	材料	備考
上衣	肩当て布	キャラコ 平織 白色
	白線テープ	セーラーカラー用 平織 1.1cm幅 袖山裏のループ用 平織 8mm幅
	スプリングホック	前あき用 15mm 黒色×4個オスのみ
	ボタン	ウエストベルト用 4つ穴 直径1.3cm×7個 1.5cm×1個 カフス用 4つ穴 直径1.3cm×2個
下衣	スプリングホック	ウエストベルト用 15mm 黒色×1個オスのみ
	ボタン	ウエストベルト用 4つ穴 直径1.7cm×1個 脇あき用 4つ穴 直径1.3cm×1個
	紐	直径3mm 丸コード 2本
共通	糸	ミシン糸 ボタン付け・穴かがり用糸

2-3 パターン

パターン（構成）については、先ず目視観察から布端の耳、拡大写真から布目、斜文の角度を観察し、概略を捉えた。次に、資料が可撓物であることに加え、非破壊で調査しなければならないことから、メジャーや方眼定規による計測のほか、経緯の糸を歪めない範囲で、資料の平面に透明シートを当て、縫い目に沿って形状を採取した。その結果を、アパレルCAD²⁴を用いて線と面を合成してパターンを作成した（図10）。そのパターンを厚手シーチングで組み立て（図11）、立体感の再現ができていないか確認した。採寸値は、数mm程度の差が生じたが、資料が運動量の多い体操服であることから、摩耗、変形、洗濯による影響が考えられ、それらの影響が少ない部分を考慮して検証を進めた。



図9 体操服のデザイン（筆者撮影・作成）

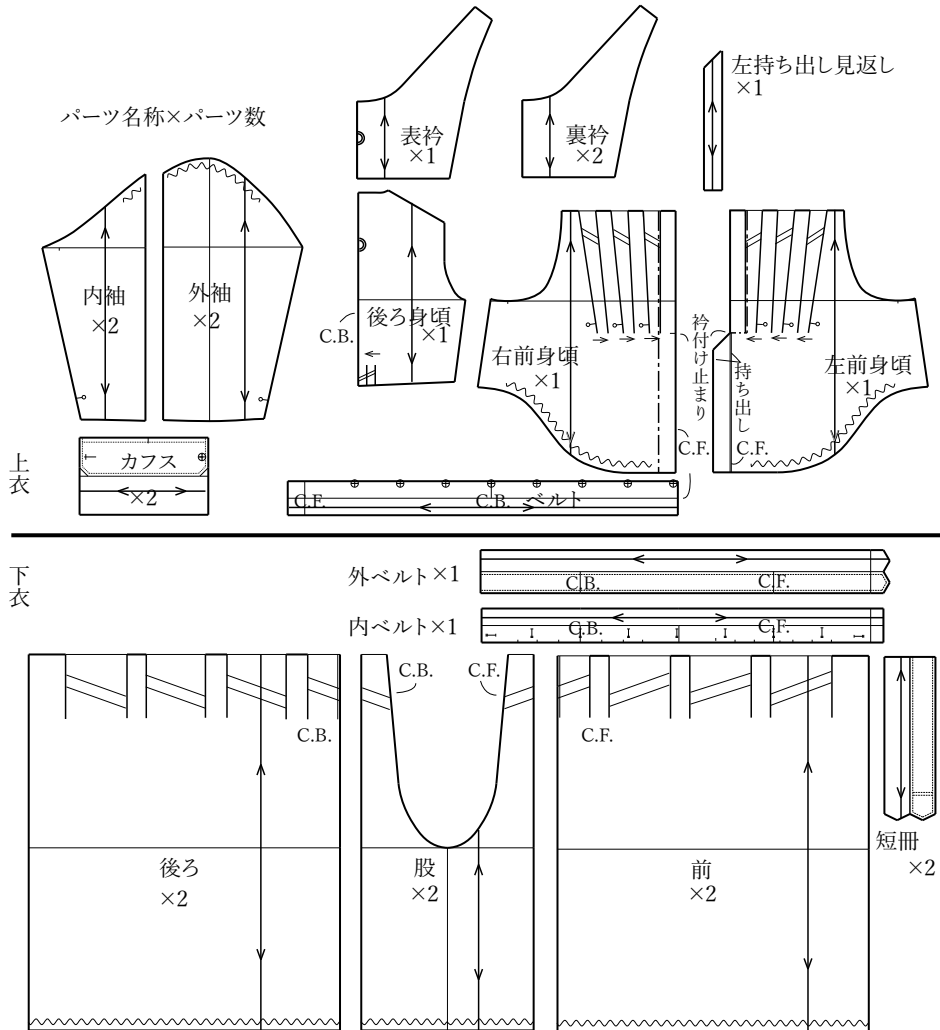


図10 体操服のパターン (筆者作成)

その結果、前身頃の前打ち合わせ部分を除き、左右同形状同寸であった。しかし、袖下縫い目の長さが左袖の方が1.1cm長かった。現在も紳士服の袖丈を個人の左右差に合わせて長さを調整するため、個人に合わせて袖を誂えていたと思われる。前章で取り上げた大河内婦人子供洋服店の西島によれば、体操服の調製に際して店主の大河内治郎が生徒を採寸し、その記録を西島がノートに記録したという証言が残されている²⁵。また体操服の上衣内側に縫い付けられたタグには、個別の番号が振られており(図12)、生徒それぞれの体型に合わせて体操服が調製されたことが窺える。

上衣のパターンは、肩縫い目が肩先点より後ろに、脇縫い目が背面に回っていた。また、前身頃の前端とVネックラインを一直線上にとり肩線と直角に交わっていた。肩や脇の縫い目が背面に回るのは当時の洋裁教本²⁶に散見され、一般的なパターンが採用されているといえる。しかし、前中心からネックラインにかけてタテ糸を通し、さらに肩線にヨコ糸を通しては大きな特徴といえる。一般的にVネックラインのパターンは形状に合わせて裁断するが、敢えて布目を通したのは、体操服であることからネック



図11 シーティングによる再現（筆者作成）

図12 体操服上衣内部につけられたタグ（筆者撮影）

ラインの歪みを最小限にとどめるためではないかと推察する。

下衣のパターンは、タックの折幅にごく僅かな差があったが、ほぼ前後差のない深いタックであった。また股上寸法が34.1cmと現代の標準の27cmより深かった。それは屈伸や下肢開脚運動などの動作を妨げないように、予め腰幅や股ぐり前後長を長くすることで、運動量を確保したと思われる。

以上のことからパターン形状は、現代と大きく異なることが明らかとなり、大正期の女子体操服の製作に用いられた洋裁技術やその特徴が浮き彫りとなった。

おわりに

本稿では、お茶の水女子大学に所蔵されるセーラー・ブルーマー型体操服の歴史的な位置づけと資料寄贈の経緯、および大正時代に製作されたと推定できる体操服に使用された材料と形態的特徴のいくつかを明らかにした。洋服式的女子体操服の中でもセーラー・ブルーマー型体操服は、鹿鳴館時代以後、女性の洋装化が進展する大正末以前の間に着用が試みられた貴重な事例であり、かつ欧米における体育理論の展開や女性服改良の動向と同期するかたちで導入されたと考えられる。また関東大震災以前にさかのぼる本学の教育を物語る体操服は貴重であり、これが本学に所蔵されるに至った経緯には、奥水らの女子体育に関する研究活動が深く関わっていた。実物資料の材料および形態的特徴に関する調査からは、布地には斜文織の綿織物が用いられていたこと、上衣と下衣とがボタン留めされたデザインであり、特に上衣のネックラインにタテ糸を通し、胸部上部にタック3本が施されている特徴を見出した。

残された課題は多い。まず、体操服の布地については、非破壊での検証であったため、使用された組成、染料や色については分析・考察が及ばなかった。また当時の証言から綿の「小倉織」が使用されたことが窺えるが、福岡県の小倉発祥の堅牢な綿織物から派生した小倉織が、明治期以降どのように洋服生地へと展開していったのか、その歴史的展開についても調査したうえで、体操服に使用された布地がいかなる特

徴をもつものであったのか、さらに考察を深めていきたい。

次に、セーラー・ブルーマー型体操服の機能性の検証である。上衣と下衣がウエスト部分でボタン留めされた体操服は、ワンピースの体操服や着物・袴に比べてどう機能が向上したのだろうか。今回明らかとなった体操服のパターンからレプリカを作製し、それを着用して動作の確認、機能性の検証を行ってきたい。その際、当時行われていたスウェーデン体操がどのような姿勢、動作を伴う体操であったのかも考慮に加えたい。さらに和装に慣れた当時の女子師範学校の生徒にとって、洋服式の体操服を着る経験が身体や意識にどのような影響をもたらしたのか。これについては、当時本学に在籍した卒業生の証言を検証するほか、本学以外でこの体操服を着用した女子師範学校の関係資料も調査していく予定である。

加えて、井口阿くりが体操服の調製を依頼した大河内婦人子供洋服店の調査も念頭におきたい。日本における女性の洋装化を考えるうえで、洋服を製作、提供した商店や職人の貢献は大きいといえる。井口がアメリカから持ち帰ったセーラー・ブルーマー型体操服をどのように理解し、また日本人に合わせて調整が行われたのか。このことを解明するためには、井口が留学した1900年前後のアメリカの女子体操服も検証する必要がある。今後の課題として、アメリカの女子体操服の実物資料の調査および日本の事例との比較も付け加えておく。

謝辞

本研究は、興水はる海先生らによるアンケート調査および見戸タカ氏による体操服の寄贈がなければ実現できなかった。ここに、体操服寄贈の経緯とそれに尽力した興水氏らの研究活動が生んだ成果を改めて記すとともに、情報を提供して下さった興水氏の長女・角藤智津子氏と角藤氏と筆者らをつないで下さった秋田テレビの佐藤真弓氏に感謝の意を示したい。

なお、本研究はJSPS科研費20K02361の助成を受けたものである。

注

- 1 興水はる海編『写真でつづるお茶の水の体育110年』1988年、42-43頁。本著作は、興水が1988年にお茶の水女子大学を定年退職する際に、最終講義の資料として作成したものである。
- 2 お茶の水女子大学の同窓会施設であった桜蔭会館は、2019年に国際交流留学生プラザに移転した。同館に設けられていた歴史資料室は1999年に開室、2019年3月に同窓会館の移転とともに閉室した（大学資料の展示施設については、2006年に大学本館1階に歴史資料館が新たに設置されている）。
- 3 井口阿くりは秋田県出身で、郷土の先覚者を紹介する番組が制作された（秋田テレビ制作「秋田人物伝：井口阿くり」2019年5月）。この番組制作の過程において、興水の長女を通して、興水が取り組んだ井口阿くりの体操服に関する情報提供がなされた。筆者らは、親族の同意を得て、秋田テレビに提供された記録資料を参照した。
- 4 明治5年に設立された官立女学校における袴着用については、佐藤秀夫『日本の教育課題2 服装・頭髪と学校』東京法令、1996年、217-218、226頁。明治8年に行われた東京女子師範学校の開校式における男袴着用に関しては、山川菊栄『おんな二代の記』東洋文庫203、平凡社、1972年、37頁。
- 5 お茶の水女子大学百年史刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』1984年、10-11頁。
- 6 佐藤前掲書、227頁。

- 7 女性体育史研究会編『近代日本女性体育史—女性体育のパイオニアたち』日本体育社、1981年、43-54頁。
- 8 輿水前掲書、13頁。輿水は1979年頃に本学卒業生へ体操服に関するアンケート調査を実施しており、この調査から明治21年頃の体操服の着用状況についても情報を得た可能性がある。このときのアンケート調査をもとに学会発表や論文投稿された形跡は確認できない。
- 9 成田順『被服教育六十年の回顧』真珠社、1974年、32頁。
- 10 坪井玄道・田中盛業編『普通体操法』文部省、1887年、194頁。文献名や引用文の掲載に際して、漢字の旧字体は新字体に改めた。
- 10 輿水前掲書、37-43頁。
- 11 輿水前掲書、37-43頁。
- 12 二階堂トクヨ『体操通俗講話』宝文館、1917年、725-728頁。
- 13 女性体育史研究会前掲書、170-171頁。
- 14 写真に写る下衣がスカートかキュロットスカートであるかは判断できない（東京女子高等師範学校『学校生活』1934年10月https://www.lib.ocha.ac.jp/archives/pic009_gakkou.html 2022年9月22日アクセス）。
- 15 西島芳太郎『旧師大河内治郎氏の成功を語る』1936年、58-59頁。
- 16 同上、59頁。
- 17 なお、「通学兼用」が計画された体操服であったが、セーラーの上衣にスカートを合わせた通学服が実際に着用されたのか、具体的な証言は確認できていない。図5は国語体操専修科の教員および生徒とみられ、他の専攻の生徒については、大正期の卒業写真記念帖に掲載された授業風景の写真を見るかぎり、体操以外の授業では着物が袴姿である（東京女子高等師範学校『卒業記念写真帖』大正8年3月）。
- 18 井口阿くりほか『体育之理論及実際』国光社、1906年、403-405頁。
- 19 筆者らが確認できているのは、宮城・茨城・埼玉・広島・徳島・福岡の女子師範学校である。宮城県師範学校女子部については、宮城県教育委員会編『宮城県教育百年史』第1巻（明治編）、ぎょうせい、1976年、口絵。広島県三原女子師範学校については、勝場勝子「広島県三原女子師範学校における運動服装の変遷」『広島大学学校教育学部紀要』第2部、第9巻、1986年、149-153頁。茨城、埼玉、徳島、福岡については、各女子師範学校の運動会の写真がプリントされた郵便はがき（筆者蔵）に、セーラー・ブルーマー型体操服の着用が確認できる。全国各地に設立された女子師範学校（師範学校女子部）におけるセーラー・ブルーマー型体操服の普及については、現時点では全数把握はできておらず、今後の課題としたい。
- 20 例えば、大正11（1922）年3月の『卒業記念写真帖』など（https://www.lib.ocha.ac.jp/archives/pic028_memory_t1103.html 2022年9月27日アクセス）。また後述する実物資料の寄贈者の在学年代は大正5～9（1916～1920）年である。
- 21 筆者らはアンケート調査の際に回収されたはがきを直接は確認できていないが、秋田テレビの制作した映像に写し出されたはがきのメモ書きを確認した。
- 22 東京女子高等師範学校編『東京女子高等師範学校・第六臨時教員養成所一覽』自大正5年4月至大正6年3月、1916年、222頁。
- 23 成瀬信子文化学園大学テキスタイル研究室被服材料学グループ改訂『改訂版基礎被服材料学別冊主な布地』文化出版局、2014年、14頁。
- 24 パターンマジックⅡ®東レACS株式会社製。
- 25 西島前掲書、59頁。
- 26 例えば、堀越千代子『和洋裁縫教本洋服編下』東京宝文館1915年、18、24-28、35、80、102-103、111-114頁など。